

GS05-3 水毒鑑別のための体成分における客観的予測因子と自覚症状の関連について

○村上 綾¹, 貝沼 茂三郎², 瑞慶山 にいな¹, 小林 大介¹, 窪田 敏夫¹, 島添 隆雄¹

¹九大院薬, ²九大院医地域医療教育ユニット

【背景】漢方医学において水毒とは、水の過剰や停滞であると考えられている。めまいやむくみ、下痢などが自覚症状とされるが、水毒の客観的評価に関する研究はほとんどなされていない。近年、生体インピーダンス法を用いた体成分分析装置により筋肉量や脂肪量などの体成分の測定が容易となった。本研究では、体成分における水毒鑑別のための予測因子の探索を行った。

【方法】2010年6月から2015年8月の間に九州大学病院漢方外来を受診した20歳以上の初診患者557名のうち、利尿薬や漢方薬服用中の患者等を除いた230名を対象とした。対象を水毒群（振水音群および浮腫群）と非水毒群にわけ、InBody 730（InBody社）を用いた初診時の体成分値をカルテから抽出した。水毒群と非水毒群で差のある項目を抽出し、ROC解析にてカットオフ値を算出した。

【結果】女性（振水音群25名、浮腫群13名、非水毒群100名）を対象に解析し、振水音鑑別の予測因子とそのカットオフ値として「内臓脂肪レベル5.4以下」、「体脂肪率27.8以下」、「BMI19.2以下」「体幹筋肉量指数6.5以下」が得られた。

【考察】振水音は内臓脂肪が少なく、腹力の弱い痩せ気味の患者に多く出現することが示唆された。浮腫においては感度や特異度が低いため、さらなる検討が必要である。また、問診表を用いた水毒に関連する自覚症状の抽出についても報告予定である。